

# 蕭紅：魯迅先生の思い出（下）

—翻訳と注釈—

平 石 淑 子

福建菜館から取り寄せた料理の中に、魚の団子があった。

海嬰は一口食べておいしくないと言う。許先生は相手にしなかったし、ほかの人も皆取り合わなかった。団子にはおいしいものも、おいしくないものもあったのだ。ほかの人が口にしたものに、たまたま変な味のものはなかったのだ。

許先生は海嬰にもう一つ取ってやった。海嬰は一口食べ、またおいしくないと言って、騒ぎ出した。他の人は相手にしなかったが、魯迅先生は海嬰の皿から取って食べてみた。確かにおいしくなかったので、魯迅先生はこう言われた。

「この子がおいしくないと言うのには、必ずこの子の道理があるのです。調べもしないで否定するのはいけません」<sup>1)</sup>。

.....

後に私はこのことを思い出し、許先生と二人の時に話題にしたことがある。許先生は「周先生のなさり方は、私たちにはとても真似できませんよね。たとえ小さなつまらないことでも」と言われた。

魯迅先生は紙で包む時、とても几帳面に包まれる。送る本を、魯迅先生はいつも許先生から受け取って自身で包まれる。許先生も包むのはたいそうお上手なのに、魯迅先生はそれでも自分で包もうとなさる。

魯迅先生は本をきちんと包むと、細い紐で括る。その包みはきちんとしていて、どの角も歪んだり潰れたりしていない。それから鋏で、本を括った紐をきれいに切りそろえられる。

本を包む紙はどれも新しくはない。みな町で買い物をして戻った後とっておいたものだ。許先生は町から戻ると買って来たものを開け、開けるはしから品物を包んでいたハトロン紙をたたみ、細紐をくるくると巻かれる。細紐にこぶがあつたりするとすぐにほどく。必要な時にいつでも使えるようにしておくのだ<sup>2)</sup>。

魯迅先生のお住まいは大陸新村9号だ<sup>3)</sup>。

棟前の路地<sup>4)</sup>に入ると、一面に大きな四角い敷石が敷き詰めてある。中はどれほどとも騒がしくなく、出入りするのには時には外国人だったりする。外国人の子どもが中でぼつんと遊んでいるのを見ることがある。

魯迅先生の家の際には大きな看板が掛けられていて、そこには「茶」という文字が書いてある。

1935年10月1日のこと<sup>5)</sup>。

魯迅先生の家の客間には長方形の机が置いてある。その机は黒くて、塗りももうあまり新しくないが、ボロボロというわけでもない。机の上にはテーブルクロスのようなものはなく、真ん中に緑豆色の鉢がぽつんと置いてあり、鉢には数株の、葉の大きな万年青<sup>おもと</sup>が植えてあった<sup>6)</sup>。机を囲んで木の椅子が七、八脚あった。特に夜は、路地にはわずかの物音も聞こえなかった。

その夜、魯迅先生や許先生と一緒に長机でお茶を飲んだ。その夜は満洲国<sup>7)</sup>に関する話をたくさん話した。食事が終わってから話し始め、そのまま9時、10時まで、そして11時になった。しばしばおいとましようと思った。魯迅先生を少しでも早く休ませてさしあげたかった。魯迅先生の身体の具合があまり良くないように見えたから。それに許先生が、魯迅先生は一ヶ月余り風邪を引いていて、好くなったばかりだとおっしゃっていたから。

しかし魯迅先生は疲れたような様子はお見せにならなかった。客間にも横になれる籐椅子が置いてある。私たちは何度も籐椅子でお休みくださいと勧めたが、先生はそうされず、そのまま椅子に座っておられた。そればかりか、二階に行って毛皮の裏の付いた長衣を羽織って来られた。

その夜、魯迅先生は一体何を話されたのだろう、今ではもう思い出せない。思い出したとしてもそれがあの夜に話したことか、その後に話したことかがよく分からない。11時を過ぎ、雨が降り出した。雨がぽつぽつと硝子窓を叩く。窓にはカーテンがなかったので、偶々振り向いた時、硝子窓に小さな水の流れが伝わるのが見えた。夜は既に更けていたし、雨も降り出した。気持ちがせいて、何度か帰ろうと腰を上げたのだが、魯迅先生と許先生はそのたびに引き留められた。「12時前なら車はありますよ」。だから12時近くまでお邪魔し、ようやく雨具をつけて客間の外の鉄のドアをギーッと開けたのだが、魯迅先生はどうしても外まで見送ると言って聞かれない。どうして先生はそこまでなさるのだろうか。こんな若い客に対して、こんな風に見送ってくださるのは当然のことだろうか。雨で髪が濡れれば、風邪を引かれてまた長引くのではないだろうか。鉄のドアの外に立ち、魯迅先生は隣の家「茶」と書かれた大きな看板を指して言われた。「今度来る時はこの『茶』の字を覚えて置きなさい、この『茶』の字の隣ですから」。そして手を伸ばして、鍵の傍に打ち付けられた九号の「九」の字にほとんど触れんばかりにして、「次に来る時は茶の傍の九号と覚えておきなさい」。

それから四角い敷石の所を通って、路地の外に出た。振り返って奥を見ると、魯迅先生の家と並びはずっと真っ暗で、あのようにはっきりと教えて戴かなかっただけで、次に来る時にはわからなかったかもしれない<sup>8)</sup>。

魯迅先生の寝室には鉄製の大きなベッドがある。ベッドの上には許先生お手製の刺繍を施した白い覆いが掛けられている。ベッドの端に寄せて二人分の掛け布団が畳まれているが、どちらも厚くて柄が入っている。入口側の頭の所には引き出しがある。部屋に入った左側に八仙卓<sup>9)</sup>、机の両側に籐椅子が一つずつ、四角い机の並びの角に縦長の物入れがある。それはもともと服を掛けておくものだが、服はほとんどなく、飴の箱やら、ビスケットの入れ物やら、瓜子の缶やらで一杯になっている<sup>10)</sup>。××社長の奥さんが奥付の印をもらいに来た時、魯迅先生はこの物入れの下にある大きな引き出しからそれを取り出された。壁に沿って窓の方へ行くと、飾り台<sup>11)</sup>が一つあり、上には四角い、緑の草が一面に浮いたガラスの金魚鉢がある。中を泳いでいるのは金魚

ではなく、灰色で腹の平べったい小さな魚だ。金魚鉢のほかには丸い時計が一つ、そのほかは本が一杯に詰まっている。鉄のベッドの窓よりの本棚は、棚の内も外も皆本だ。最後が魯迅先生の書き物机だが、その上も本だらけだ。

魯迅先生の家は、上から下までどこにも軟らかい椅子<sup>12)</sup>がない。魯迅先生が仕事の時に座られる椅子は堅いものだし、下に下りて客の相手をする時に坐られる椅子もまた堅いものだ。

魯迅先生の書き物机は窓に面している。上海の路地にある家の窓は、ほとんど壁一面といっていいほど大きい。魯迅先生はそれを閉められる。先生が仕事を始められる時の習慣だからだ。風が困るのだ。風が吹くと紙が動く。始終紙が飛ばされないようにしていたら、おちおち書いていられない。だから部屋の中は蒸籠みたいに暑い。魯迅先生に下に下りてくださるようお勧めしても、うんとはおっしゃらない。場所を変えないのが魯迅先生の習慣なのだ。太陽が照りつける時もある。許先生が、机を少し動かしたら、と言われるのだが、全く聞く耳を持たれない。ただ汗だくになっておられる。

魯迅先生の書き物机には青い格子縞の布<sup>13)</sup>が掛けてあり、四隅を画鋲で留めてある。机の上には小さな硯と墨、毛筆は筆立てに立ててある。筆立ては陶器で、見たところさほど凝ったものではないようだ。それは一匹の亀で、亀の背にいくつもの穴があいており、筆をその穴に挿すのだ。魯迅先生はほとんど毛筆を使われる。ペンもないわけではない。引き出しの中にしまっている。机の上には大きな四角い琺瑯の灰皿、それから湯飲みが一つ、湯飲みには蓋が乗っている<sup>14)</sup>。

魯迅先生の習慣は他人とは違う。文章を書く時に使う資料や来た手紙は、皆机の上に積んである。机の上は積まれたもので一杯だ。書き物をする場所だけが何とか手が置ける位で、そのほか半分は本や紙に占領されている。

机の左側の隅には緑色の笠の電気スタンドがある。電球は横向きに付いており、それは上海ではごく普通のスタンドだ。

冬は二階で食事をする。魯迅先生はご自分でコードを引っ張って、電気スタンドのコンセントを天井のソケットから抜き、それから電球を装着される。食事が終わると、許先生が再びコードを装着する。魯迅先生の電気スタンドはこうになっている。長いコードが天井から引かれていたのだ。

魯迅先生の文章は、ほとんどがこの電気スタンドの下で書かれる。なぜなら魯迅先生が仕事をされる時間は、ほとんどが深夜の1時、2時からで、夜が明ける頃に休まれるからだ<sup>15)</sup>。

寝室はとにかくこんな具合だ。壁には海嬰坊っちゃん<sup>16)</sup>が一ヶ月の赤ん坊の頃の油絵が掛かっている。

寝室に続く奥の部屋は完全に本ばかりだ。あまり整理されておらず、新聞や雑誌、あるいは洋装の本などがこの部屋に雑多に置かれている。足を踏み入れたとたん紙の匂いがする。床は本に占領されてすっかり狭くなり、殆ど見えない。旅行用バスケットも本の山の中だ<sup>17)</sup>。壁からは紐や針金が引かれており、そこには小さな箱や針金の籠などがつるされている。干したクログワイ<sup>18)</sup>は針金の籠に入っている。針金は引っ張られて今にも切れそうなほどにたわんでいる。蔵書室の窓を開けると、外にはまだ干したクログワイを入れた籠が掛かっている。

「召し上がれ、たくさんあるんだから。干したのは、格別甘いわよ」と許先生は言われる。

下の台所からおかずを作る鍋や杓子の音、それから二人の歳取ったばあやたち<sup>19)</sup>が低い声でぼそぼそと何かを話している声が伝わってくる。

台所は家庭の最も賑やかな場所だ。三つの階は何れもしんとして、ばあやの声も聞こえないし、階段を駆け上がったり駆け下りたりする音も聞こえない。魯迅先生の家は、五つか六つ部屋があるが、たった五人しか住んでいない。三人が先生の全家族で、後の二人が歳取った女中だ。

客があるといつも許先生が自分でお茶を出される。ばあやの手を煩わせるとしても、許先生は下に下りて行って指示される。階段の上から大声で呼んだりするようなことは絶対になさらない。だから家中が静寂の中にある。

ただ台所だけは割合に賑やかだ。水道の水がジャアジャアと流れ、珉瑯の洗面器がセメントを打った流しで引きずられる度にこすれてジャリジャリと音を立てる。米を研ぐ音もジャリジャリ。魯迅先生はタケノコがたいそう好きだったから、まな板の上でタケノコが千切りにされる時は、包丁が動く度に音が大きく響いた。でも実際は、ほかの家の台所に比べれば静かなものだった。だから米を研ぐ音やタケノコを刻む音をそれぞれはつきりと聞き分けることができるのだった。

客間の一方に二つの書架が並べられている。書架にはガラス戸がついていて、中にはドストエフスキーの全集やそのほかの外国作家の全集があったが、ほとんどは日本の翻訳本だった。床に絨毯はなかったが、とてもきれいに掃除されていた。

海嬰坊ちゃんのおもちゃ棚も客間にあった。中は猿のぬいぐるみだとかゴムの人形だとか、汽車や自動車などが一杯に詰めこまれていて、ほかの人間にはさっぱりわからない。海嬰だけが手を突っ込んで捜し物を見つけることができる。新年に町で買った兔子灯<sup>20)</sup>。紙の毛にはほこりが積もっていたが、まだおもちゃ棚の上に置いてある。

客間には灯りが一つしかない。恐らく50ワット位だ。客間の奥のドアは上に上がる階段に面している。手前のドアを開けると、3メートル四方ほどの花壇があるが、見るような花は何もない。ただ2メートル半ほどの小さな木が植わっている。恐らくあれは柳桃(キョウチクトウ)だろう、春になるとよくアブラムシがわく。許先生は殺虫剤の噴霧器を持って大忙し、話の相手をしながら殺虫剤をまいておられる。外壁沿いには玉蜀黍が一行植わっている。許先生は「この玉蜀黍は育ちが悪いわね、土が痩せているから。海嬰が植えたがるのよ」と言われる。

春、海嬰は花壇の土を掘り返し、いろいろなものを植える。

三階は特別静かだ。太陽に向かって両開きのガラス戸が開いている。外にはコンクリート製のひさしが突き出ている、春の温かさが、入口に長く下ったカーテンを撫でる。カーテンが風で大きくまくり上げられることもある。大きな魚のふくれあがったお腹のようだ。そんな時、隣の敷地の緑色の木がガラス戸に映りこむ。

海嬰は床に座り、小さな技師になって建物を作っている。彼の建物は椅子を倒し、積み重ねて作ったものだ。それからシーツを被せて屋根にし、家全体が彼自身の賞賛の拍手の中で完成する。

その部屋はちょっとがらんとして寂しい感じがする。女中が住むような部屋でもないし、子ども部屋のようにでもない。海嬰の寝るベッドは部屋の一方に寄せてあり、大きな丸い覆いも日中は外してあって、長々と、まるで天井から床に届きそうなほど長く垂れ下がっている。ベッドはと

でも凝っていて、彫刻のほどこされた木製だ。許先生が、この家を借りる時前の借り手が置いて行ったのだと言われたことがある。海嬰と彼のばあやは、幅2メートルに近い大きなベッドに寝ているのだ。

冬に焚かれていた暖炉が、3月のまだひんやりとしている床にある。

海嬰は三階ではあまり遊ばない。学校に行くほかは、庭で自転車に乗っている。彼は跳んだり跳ねたりがとても好きだ。だから台所、客間、二階、彼が走り回らないところはない。

三階は一日中高い所でがらんとしている。三階の奥にはもう一人の歳取った女中が住んでいるが、一日中ほとんど上には上がらないので、階段をきれいに拭いておくと、夜まで一日中、ぴかぴかのままだ。

1936年3月、魯迅先生は病気になられた。二階の寝椅子に横になり、心臓はいつもよりも激しく鼓動し、顔色も少し悪かった<sup>21)</sup>。

許先生はその逆で、顔は紅潮し、目はしっかり見開かれていた。話し声は静かで、いつもほどせわしくもなくされていなかった。下に下りて客間に入るなり、許先生はこう言われた。

「周先生は御病気で……呼吸が……とても荒いのです。上で寝椅子に横になっておられます」

魯迅先生の荒い呼吸は、先生のそばに行かなくても、寝室に入ればすぐにわかった。鼻と髭が震え、胸が上下していた。目を閉じ、ほとんど手から離れたことのない煙草も、放置されていた。籐椅子の背もたれにはクッションが置かれている。魯迅先生の頭はやや後ろに傾き、両手はぶらりと垂れていた。眉はいつもと同じでしかめられることはなく、顔は穏やかで、のびやかで、身体に何の苦痛もないかのように見えた。

「いらっしゃい」、魯迅先生はちょっと目を開けて、「油断して、風邪を引いて、呼吸が苦しくなりました……書庫に行って本を見ていたのですがね……あの部屋は誰も使っていないから特に冷えるのですよ……戻ってきたらもう……」

許先生は、魯迅先生が一生懸命話しておられるのを見て、慌てて話を引き継ぎ、周先生がどんな工合なのかを話された。

医者には診てもらい、薬も飲んだが、喘息はおさまらない。午後医者がまた来て、帰ったばかりだと。

寝室は夕暮れの中で少しずつ暗くなっていった。外は少し風が出て、隣の敷地の木が風に揺れる音がした。よその家の窓が、風に吹かれてひとりでに開いたり閉まったりする音が聞こえる。家々の排水溝からちょろちょろと水音が聞こえる。恐らく夕食の後、皿や碗を洗った残り水だろう。夕食の後、散歩に行く者は散歩に行くし、友人に会う者は会いに行く。路地を行き来する人はまばらだが、途切れることはない。女中たちは前掛けをまだ解かぬまま、裏口のあたりで立ち話をしている。子どもたちは三人五人とかたまって、表門、裏門と走り回っている。路地の外では車が行き交っている。

魯迅先生は寝椅子に横になり、静かに、じっと目を閉じておられる。やや土気色の顔が暖炉の火に少し赤く染まって見える。煙草の缶は書き物机の上に置かれ、蓋は閉まったまま、湯飲みも机の上に置かれたままだ。

許先生は階段をそっと歩かれる。許先生が下に下りて行かれると、二階には魯迅先生が一人、



椅子に座ったまま取り残される。呼吸が魯迅先生の胸を規則正しく、高く持ち上げている。

「魯迅先生はお休みにしなければいけません」。須藤先生<sup>22)</sup>はそう言われた。だが魯迅先生はこれまで休んだことなどなく、そればかりか頭の中では考えることがどんどん増えてしまっている。やらなければならないことはすぐにやらなければだめなのだ。「海上述林」の校正、コルヴィッツの版画の印刷、「死せる魂」下巻の翻訳、たまたまこれらは同時に始められたことだが、その上三十年集(魯迅全集)も出そうとしておられる<sup>23)</sup>。

魯迅先生は自分の身体は良くないが、健康に注意を払う時間はますますないと感じておられるので、たくさん、急いで書こうとされるのだ。当時皆はその気持ちに分からなかった。皆魯迅先生が休息されないのは、それを軽視されているからだと思っていたが、後になって魯迅先生の「死」という文章を読み、初めて理解できたのである<sup>24)</sup>。

魯迅先生は自身の健康が思わしくなく、仕事ができるのはあと何年もないことを知っておられたのだ。死ぬことはたいしたことではない、人類により多くのものを残せさえすれば。魯迅先生はそういう方だったのだ。

間もなく書き物机の上にはドイツ語の辞書と日本語の辞書が並べられた。ゴーゴリの「死せる魂」の翻訳がまた始まったのだ。

魯迅先生の健康はあまりすぐれず、風邪を引きやすかった。風邪を引いていても、いつものように客の相手をし、手紙の返事を書き、原稿の校正をされた。だからいつも一ヶ月か半月は風邪を引きずられた。

瞿秋白の「海上述林」の校正刷りについては、1935年の冬も、1936年の春も、魯迅先生は休みなく目を通しておられた。数十万字の校正刷りを三回ご覧になった。しかも印刷所から送ってくる校正刷りはいつも十頁とか八頁で、全部一緒に送ってくるのではない。だから魯迅先生はしょっちゅうこの校正刷りに追い立てられておられ、とうとうこのようにおっしゃったものだ。

「見てごらんさ、あなたたちの話に付き合いながら、校正刷りを見ているんです。目は読んでいても、耳はちゃんと聞いています……」

客が来ると、面白い話をしながら、筆を置かれることもある。また、「あと少しです……どうぞおかけください……」と言われることもあった。

1935年の冬、許先生はこう言われた。

「周先生のお体はもう以前ようではありません」

ある時魯迅先生は料理店で客をもてなされた。店に入った時はとても気分が良いように見えた。その時は北京ダックを食べたと思う。丸のアヒルが大きな鋼の串に刺して持って来られた時、皆はこのアヒルがとてもいい工合に焼かれていると思ったし、魯迅先生も笑っておられた。

料理がすべて出そろったのに、魯迅先生は寝椅子に座って煙草を一服され、目を閉じておられた。食事が済むと、酒を飲む者もいて、皆が騒々しくし始めた。林檎を奪い合ったり、互いに冗談を言い合ったり、面白い話をする者もあった。だが魯迅先生はその時、寝椅子にもたれ、目を閉じ、厳粛に黙っておられた。手の煙草の煙をゆらゆらと立ち上らせながら。

魯迅先生も酒を過ぎされたのだろう、と言う者もあった。

でも許先生は、違うと言われた。

「周先生のお身体は以前とは違うのです。食事が済むといつも目を閉じて少し休まれるのです。前はこんな習慣なかったのに」

周先生は椅子から立ち上がられた。恐らく酒を飲み過ぎたという言葉が聞こえたのだろう。

「私は酒はあまり飲みません。小さい時、父が酒を飲むことについて、母が常々どれほど厭な思いをしてきたか。母は、大きくなったら酒を飲んではいけない、お父さんのようになってはだめだと言ったものです……だから私はあまり飲みません……これまで酔ったことはないのです……」<sup>25)</sup>

魯迅先生は充分休まれると、煙草を新しくし、立ち上がって自分も林檎を食べようとされたが、林檎はなくなってしまっていた。魯迅先生は、

「あなた方には勝てませんね、林檎は皆取られてしまった」と言われた。

奪い取ってまだ持っていた林檎を献上した者もあったが、魯迅先生は召し上がらずに、ただ煙草をふかしておられた。

1936年春、魯迅先生の身体はあまり良くなかったが、病気というわけではなく、夕食を召し上がると寝椅子に横になり、暫く静かに目を閉じておられるようになった。

許先生が私に、周先生は、北平におられた時には、ふざけて、机に手をついて跳ぶと跳び越せたこともあったが、このところそんなことはなさらなくなった、恐らく以前のような敏捷さがなくなったのだろうと言われた。

これは、許先生が私だけに話されたことで、魯迅先生には聞こえなかった。相変わらず寝椅子の上で黙っておられた。

許先生が暖炉の口を開け、放り込まれた石炭のころころという音が、魯迅先生の目を覚ました。話を始めれば、魯迅先生の気力はいつもと変わらなかった。

魯迅先生が二階のベッドに横になられてからもう一ヶ月余りが経ち、喘息はおさまった。しかし毎日熱が出て、特に午後にはいつも38度から39度の間で、39度を超えることもあった。そんな時、魯迅先生の顔は少し紅潮し、眼光も弱くなった。何も召しあがらず、あまり眠られなかったが、うめかれるようなことはなかった。全身何処も痛むところはないようだった。ベッドに横になっている時は目を開いておられたが、寝ておいでなのかどうかわからないくらい静かに横になっておられる時もあった。お茶もあまり飲まれず、ほとんど一時もやめることのなかった煙草も、今はほとんど顧みられなかった。煙草の缶はベッドにはなく、遠く書き物机の上に置かれたままになっていた。吸いたければ、許先生に頼まれるのだった<sup>26)</sup>。

許先生は魯迅先生が病気になってからより忙しくなられた。時間になると魯迅先生に薬を飲ませ、時間になると魯迅先生の体温を測り、体温を測ると医者がくれた表にそれを書き込む。表は硬い紙で、上にたくさんの線が引いてある。許先生はこの紙に、定規で度数を書き込む。表には尖った小さな丘のようなものが描かれる。それはまた尖った水晶のようにも見える。高いの、低いのが、一列に連なって立っている。許先生は毎日描いておられたが、そのつながって途切れることのない線は、低いところから高いところへ、高いところから低いところへ。その高いところが高くなると良くない。魯迅先生の熱が上がったということだから。

魯迅先生を見舞いに来る人は、ほとんどが二階まで上がらない。魯迅先生にゆっくり休んで戴くためだ。だから客の対応なども許先生の肩にかかってくるのだ。それから本、新聞、手紙、皆許先生が目を通し、必要なことは魯迅先生に伝え、必要がなければとりあえず一つ所にまとめておき、魯迅先生が少し良くなれた時に渡される。だがこの家庭には更に多くの細々とした用事があった。例えば歳取ったばあやが病気になって何日か暇を取る。海嬰の歯が抜けて、歯医者に連れて行かなければならないが、連れて行く人がいない、これも許先生がしなければならない。海嬰が幼稚園で勉強するのに鉛筆を買う、ボールを買う、それから臨時の出費。上に上がって来て、落花生の飴が食べたいだの、ミルクアメが食べたいだの。上がってくる時は走りながら叫ぶ。許先生は慌てて彼を引き留め、彼を連れて下に下りてから初めてこう諭される。

「お父様はご病気なのよ」。それから金を取り出し、ばあやに、飴を買うように、でも特別たくさんは買わないように、と言いつける。

電気代の集金が来る。下でドアを叩く音がすると、許先生は急いで下に下りる。これ以上何回も叩かれて魯迅先生を起こしてしまうことを恐れておられるのだ。

海嬰はお話をしてもらうのが一番好きだ。これもとにかく面倒臭い。許先生は海嬰の相手をしてお話を聞かせるほか、暇を見つけては長机で、魯迅先生が病気のために滞っている校正刷りに目を通される。

この間、許先生は魯迅先生よりも更に多くのすべてを取り仕切らなければならない。

魯迅先生が食事をされる時は、二階で一人きり、四角い木の机が一つだけだ。許先生は毎食ご自分で二階に運ばれる。どれも小さな皿に取り分けられている。小皿は直径が5～6センチもない。一皿目には豌豆の豆苗かほうれん草、もしくはヒユナ<sup>27)</sup>、黄花魚や鶏肉のようなものも小皿に載せて二階に運ばれる。鶏肉の場合は、鶏肉の一番良いところを選んだもの。魚なら、やはりその一番良いところを、許先生が念を入れて選び、小皿に取り分けられる。

許先生は箸をあちこちさせながら一階の食卓の料理をより分けられる。野菜は軟らかいところを選ばれる。茎はだめ、葉っぱのところだけ。魚や肉は軟らかく、骨などささるものがないところを選ばれる。

限らない期待と限らない希求を胸に、祈りを捧げるよりももっと敬虔な目で、許先生は自身で周到により分けた料理の皿を眺め、それから階段を探り探り上がって行かれる。

魯迅先生が一口でもたくさん食べてくださるように、少しでもたくさん箸を動かしてくださるように、一口でもたくさん鶏のスープを飲んでくださるように。鶏のスープと牛乳は医者に言われたもので、少しでも多く飲んで戴かなければならない。

食事を運ぶと、許先生はそばに付き添われることもあったし、下に下りてほかの仕事をされることもあった。三十分経つと上に皿を取りに行かれる。その皿にはまだいっぱい、時には元のまま、少しも箸をつけないまま、また持って下りて来られる。この時許先生は眉を少ししかめておられる。そばにもし誰かが友人がいれば、許先生はこうおっしゃる。「周先生は熱が高いので、何も召し上がれない。お茶も飲もうとなさらないのよ。本当に大変、骨が折れるわ」

ある日、許先生はポーランド式のパン切り用包丁でパンを切られた。客間の奥の四角い机の上で。許先生は切りながら私に言われた。



「周先生に少しでもたくさん召し上がるよう勧めたら、周先生はこう言われるのよ。好くなればもっと養生しますが、今は無理に食べても何の役にも立ちません、て」

許先生はそれから私に問いかけるようにこう言われた。

「それもそうかしらね」

それからミルクパンを上を持って行かれた。できあがった鶏のスープを角形パッドからご自分で取り出し、客間の奥の四角い机に置かれた。許先生が上がって行かれた後、その熱い鶏のスープは四角い机の上でゆったりと湯気を立ち上らせていた。

許先生が二階から戻って来てまたこう言われる。

「周先生はいつもスープは召し上がらないのだけれど、病気の時はもっと頑固に召し上がろうとされないの」

許先生は自分を慰めるように言われた。

「周先生は頑固だわ、堅いものや揚げ物が好き、ご飯も堅いご飯がお好きなの……」

許先生は上と下を駆け廻り、息も少し乱れていた。そばに坐っていると、心臓の鼓動まで聞こえてきそうだった。

魯迅先生が一人で食事をなさるようになってから、客はほとんど上には上がらなくなった。許先生が遠回しに魯迅先生のお身体の経過報告をされるのを聞いて、帰って行くのだった。

魯迅先生は二階で毎日毎日寝ておられた。何日も寝ておられたので、毎日寂しい日が続いた。多分熱が下がったのだろう、許先生に尋ねられることもある。

「誰が来ましたか」

魯迅先生が少し良くなられたのを見て、一つ一つ報告される。

どんな刊行物が届いたかを聞かれる時もある。

魯迅先生の病気は一ヶ月余りになった。

魯迅先生が肺病で、しかも肋膜炎であるということが分かった。須藤先生が毎日やってきて、肋膜に貯まった水を注射で抜いたが、全部で二、三回は抜いた。

このような病気に、どうして魯迅先生は少しも気づかれなかったのだろう。許先生は、周先生はあばらのあたりが痛む時があったのに、我慢しておっしゃらなかった、だから許先生も気が付かなかったのだと言われた。魯迅先生は、他人が知れば心配するだろうし、医者に診せなければならぬだろうし、医者はきつと休めと言うだろうということを心配されていたのだ、と。魯迅先生はどうしようもないことだと分かっておられたのだ。

福民医院のアメリカ人の先生<sup>28)</sup>の検査によれば、魯迅先生の肺病は既に二十年になるという。今度発病したら恐らく大事になると。

医者は日を決め、福民医院に精密検査を受けに来るようにと言った。X線検査が必要なのだ。

しかし魯迅先生はその頃一階にも下りられない状態だった。それから何日も経ってから、福民医院に検査を受けに行かれた。X線を撮った後、魯迅先生に肺全体を撮った写真をくれた。

写真をもらって来た日、許先生は下で皆にそれを見せてくださった。右の肺の上部が黒くなっており、真ん中にも黒いところがあった。左の肺の下半分もあまり良くない、左肺の縁に添って大きな黒い円が見えた。

この後、魯迅先生の熱は相変わらず高いままで、もしこのまま熱が下がらなければ持ちこたえることは難しかった。

検査をしたアメリカ人の医者は、検査だけで薬はくれなかった。薬は役に立たないと確信したのだ。

須藤先生は、魯迅先生とは随分前からの知り合いだった。だから毎日やって来て魯迅先生に解熱剤を処方し、また肺病菌の活動を抑える薬をくださった。須藤先生は、肺がこれ以上悪くならないければ、ここで収まれば、熱は自然に引くし、危険はなくなると言われた。

一階の客間で、許先生が泣いておられた。許先生の手には一塊の毛糸が握られていた。それは海嬰の毛糸の服をほぐして洗った後、また玉にしたものだった。

魯迅先生は何も欲望のない状態だった。何も召し上がらないし、何も考えず、寝ているような寝ていないような状態だった。

暑くなってきた。客間のドアや窓は全部開け放たれ、太陽の光が外の花壇で踊っていた。雀がやって来てキョウチクトウにとまり、チュンチュン鳴いてまた飛んで行った。敷地内では子どもたちがキャアキャアと騒いでいた。熱気をはらんだような風が、人の身体に吹きかかる。季節は芽吹き春から夏に変わろうとしていた。

二階の須藤先生と魯迅先生の話し声がぼんやりと聞こえてきた。

下にはまた客が来ている。来た人は皆こう聞く。

「周先生は少し良くなりましたか」

許先生はいつもこう答えられる。「相変わらずです」

でも今日はそう言いながら涙があふれていた。湯飲みを出して客にお茶を淹れながら、左手に持ったハンカチで鼻を押さえておられた。

客が尋ねる。

「周先生がまたあまり思わしくないのですか」

許先生は

「いいえ、私が悲観的なのです」と答えられる。

暫くして魯迅先生が何か捜し物があって許先生を上に呼ばれた。許先生は急いで涙を拭き、上には行けないと言おうとしたが、あたりを見回しても代わりに行ける人がいない。そこでまだ巻き終わっていない毛糸の玉を持って上に上がって行った。

二階には須藤先生と、そのほかに二人、魯迅先生を訪ねて来た客がいた。許先生はその人たちを見るとうつむき、恥ずかしそうに笑みを浮かべられた。許先生は魯迅先生の前に行くことができず、背を向けたまま魯迅先生に何がいるのかを聞き、それからまた慌てて毛糸を手で巻き付けられた。

須藤先生を見送って下に下りるまで、許先生は魯迅先生に背中を向けたまま立っておられた。

須藤先生がお帰りになる時はいつも、許先生は革の鞆を持って表門まで見送られる。許先生はにこやかに、落ち着いて、ほほえみながら鉄の門のかんぬきを外し、革の鞆を恭しく先生に渡し、姿が見えなくなってから中に入って戸を閉められる。

須藤先生が魯迅先生の家に入出入りなさる時は、ばあやたちも敬意を表した。先生が上がり下り

される時、もしもばあやが階段の途中にいれば急いで下りて道を空け、階段の脇に立つ。ある日、ばあやが湯飲みを持って階段を上りかけたところで、二階にいた須藤先生と許先生が一緒に下りて来られた。ばあやはよけそこね、慌てて湯飲みのお茶をみんなこぼしてしまった。先生がお帰りになり、もう表門を出られたというのに、ばあやはまだそこにぼんやりと立ちすくんでいた。

「周先生は少し良くなられたのかしら」

ある日、許先生がお留守だったので、私はばあやに尋ねた。ばあやは

「分かるはずありませんよ、お医者様は毎日診察されますが、一言もおっしゃらずにお帰りになるんですから」

ばあやが毎日須藤先生を期待のまなざしで見ていることが見て取れた。

許先生は落ち着いて、取り乱した様子は見せられなかった。あの日、人前で涙を見せられはしたが、すべきことはこれまでどおりされていた。毛糸も、洗うべきものは洗ってあったし、干すものは干してあった。乾いたものは片端から玉に丸められた。

「海嬰の毛糸の服は、毎年ほどこいて、洗ってからまた編み直すのよ。一年一年大きくなるから、服も一年着たらあっという間に小さくなってしまうの」

下で親しい客と話をしながら、手は編み棒を動かし始める。

こういったことを、許先生は暇を見つけてなさる。夏には冬の準備を始めるし、冬には夏の準備をする。

許先生はいつもこうおっしゃっていた。

「私は用もないのに忙しいのよ」

控えめにおっしゃるけれど、忙しいのは本当だ。食事だって落ち着いて食べられない。海嬰がすぐ、これがいるとかあれがいるとか言う。客があったりすれば、急遽町へ買い物に行き、台所に行って煮たり焼いたりするのは言うまでもない。机に並べてからもおかずの中から客に良いところを選んで取り分ける。食後には果物も出す。林檎なら皮をむくし、クワイなら、客がもたもたしていたりうまく剥けなかったりするのを見ると、代わりに剥いてあげる。その時、魯迅先生はまだ病気ではなかった。

許先生は毛糸を編むだけでなく、ミシンで服を縫われもした。海嬰のたくさんの下着を、裁断し、窓際で縫われた。

だから許先生はご自分のことには無頓着だった。毎日上と下を駆け回り、服は皆古いもの、何度洗ったかわからない。紐やボタンも、取れてしまっていたり、すり切れていたりする。どれも何年も前の古い服だ。春、許先生は赤紫の南京緞子の長衣を着ておられたが、それは海嬰が赤ん坊の頃、人から海嬰の蒲団の側にと贈られたものだ。蒲団にするにはもったいない、長衣にしまったと許先生は言われた。ちょうどそんなことを話している時、海嬰が入って来た。許先生は目配せで、今は言わないで、と。もし言えば海嬰がまたぐずり出すから。彼のものだと言ったら、欲しいと言うに違いないから。

許先生は、冬は大きな綿入れの靴を履いておられたが、これはご自身で縫われたものだ。2月、3月のまだ朝晩が冷える頃までずっと履いておられた。

私と許先生が花壇で一緒に写真を撮ったことがある。許先生は紐が取れているからと、私を前に立たせてそれを隠された<sup>29)</sup>。

許先生は買い物も、いつも安い店でされたし、さもなくば値引きをするような所に行って買われた。

あちこちで儉約し、儉約したお金は全部本や版画の印刷に回した。

今、許先生は窓際で服を縫っておられる。ミシンのガタガタいう音がガラス戸を少し震わせている。

窓の外の黄昏、窓の内側では許先生がうつむいておられる。上では魯迅先生の咳き込む声、全部が一緒くたになり、そのエネルギーが積み重なり、蓄積していく。苦しみの中で、哀しみの中で、生に対する強烈な願望が、激しい炎のように、ゆるぎなくそこにある。

許先生の指は縫っているその布をつかみ、頭はミシンの動きにつれて何度も沈み込む。

許先生の表情は静かで、厳かで、恐れは見えない。ゆったりとミシンを踏んでおられた。

海嬰は一山の黄色い小さな薬瓶で遊んでいる。紙箱いっぱいに入れ、上へ下へと運んでいる。太陽の光に当たると金色になり、普通に置いておけば茶色だ。彼は友だちを集めて並べて見せ、威張ってみせた。こんなおもちゃは彼のほかには誰も持てなかったから。彼はこう言う。

「これはお父さんが注射をする時の薬瓶だよ、持ってる？」

誰も持っているはずがない。そこで彼は手をたたきながら誇らしげに声をあげる。

許先生は彼に手で合図を送り、大きな声を出さないようにと注意しながら下に下りて来られた。

「周先生は少し良くなりましたか」

許先生を見ると皆は決まってこう尋ねる。

「まだ相変わらずです」許先生はそう言いながら海嬰の薬瓶をつまみ上げ、「そうでしょう、こんなにたくさんの薬瓶。毎日注射をするので、薬瓶も山のようにたまるんです」

許先生が薬瓶を手になると、海嬰がやって来てちょうだいと言う。急いでその薬瓶を大事そうに紙箱にしまう。

長机には、許先生が作られた、急須にかぶせる綿入れのカバーが置いてある。その青い緞子の、柄物のカバーの下から急須を出してお茶を淹れられるのだ。

上も下も静かだった。海嬰が友だちと元気よく騒ぐ声だけが太陽の光の中で遠く踊っていた。

海嬰は毎晩寝る前、必ずお父さんとお母さんに「おやすみなさい<sup>30)</sup>」と言う。

ある日彼は三階の階段口に立って叫んだ。

「お父さん、おやすみなさい！」

魯迅先生はその時ちょうど病が重く、喉には痰が詰まっておられたのだろう、返事がとても小さかったので、海嬰には聞こえなかった。そこで彼はもう一度叫んだ。

「お父さん、おやすみなさい！」彼は少し待ったが、返事が聞こえない。そこで大声で何度も叫んだ。

「お父さん、おやすみなさい、お父さん、おやすみなさい、……お父さん、おやすみなさい……」

彼のばあやが立ちふさがって彼を押し戻した。お父様は休まれているのですから、大声で怒鳴ってはいけません。しかし彼がそれを聞くはずもない。相変わらず叫んでいた。

この時魯迅先生は「おやすみ」と言われたのだが、声が出る前に喉を何かがふさいだようになってどうやっても声が出なかったのだ。しばらくして、魯迅先生は懸命に頭を持ち上げ、ようやく

大きな声で言われた。

「おやすみなさい、おやすみ」

そう言うともた咳き込まれた。

許先生が驚いて下から駆け上がって来られ、何度も海嬰を叱った。

海嬰は泣きながら上に上がって行った。ぶつぶつ言いながら。

「お父さんは耳が聞こえないんだもの！」

魯迅先生には海嬰のこの言葉は聞こえなかった。まだ咳き込んでおられたから。

魯迅先生は4月、少し良くなられた時があった。ある日下に下りて来られ、約束のために出かけられた。服をきちんと着て、手には模様のある黒い風呂敷包みを抱え、帽子をかぶって、歩いて行かれようとした<sup>31)</sup>。

許先生は下でちょうど客の応対をしておられたが、魯迅先生が下りて来られたのを見て、慌ててこう言われた。

「歩いて行くのは無理です。車にお乗り下さい」

魯迅先生は「大丈夫、歩いて行けますよ」

許先生は重ねて勧められ、小銭を魯迅先生に渡そうとされた。

魯迅先生はいらないいらないと言って、何としても歩いて行こうとされる。

「魯迅先生は本当に頑固なんだから」

許先生はなすすべも無く、ただそうおっしゃった。

魯迅先生は夜戻って来られたが、熱はもっと高くなった。

魯迅先生は、

「車に乗るのは実に面倒です。たいした道のりじゃない、歩けばすぐです。それに、長いこと外に出なかったから、歩いてみたかったですよ……ちょっと動いたらほろがしました……やはり無理ですね……」

病気に服従させられた魯迅先生はまた寝込まれた。

7月、魯迅先生はまた少し良くなられた。

薬は毎日飲み、体温記録表にもいつも通り、毎日何度も書き込まれた。須藤先生も相変わらずいつも通りにやって来て、魯迅先生はじき良くなれるだろうと言われた。肺の菌がもうほとんど活動を停止していて、肋膜もよくなっているという。

客が来るとほとんどいつも二階に上がって挨拶をする。魯迅先生は長い病がようやく癒えたという風情で、また話をされるようになった。タオルを羽織って寝椅子に寄りかかり、手にはまた煙草があった。翻訳についても話されたし、ある刊行物についても話された。

一ヶ月間二階に行かなかったのも、いきなり二階に上がるのには少し不安があった。寝室に入っても、どこに立っていいかわからない、どこに座っていいかわからなかった。

許先生がお茶を勧めて下さったが、私は机の脇に立ったままだった。その湯のみが目に入らないかのように。

魯迅先生は恐らく私の不安がおわかりになったのだろう、こう言われた。

「痩せましたね、そんなに痩せてはダメですよ、もう少しお食べなさい」



魯迅先生はまた冗談を言われる。

「たくさん食べれば太ります、なら周先生はどうしてたくさん召し上がらないのですか」

魯迅先生はそれを聞くと笑われた。笑い声は朗らかだった。

7月以降、魯迅先生は日一日と良くなられた。牛乳や鶏のスープなど、医者に言われているのでぼつぼつ召し上がった。痩せてはおられたが、気力はしっかりしておられた。

魯迅先生は、自分は本来丈夫な体質なのだと言われた。もしだめなところがあるなら、それは病気にやられたのだと。

今回魯迅先生はずいぶんと長い間下には下りられないままで、そればかりか外出もされなかった。

病気の間、魯迅先生は新聞も読まれなかったし、本も読まず、ただ静かに寝ておられた。しかし一枚の小さな絵が枕元に置かれていて、しばしば見ておられた。

その絵は、魯迅先生が病気になる前にたくさんの絵と一緒に皆に見せてくださったもので、たばこの包みに入っているあの絵と同じ位の大きさしかなかった。そこにはふくらんだ長いスカートをはき、髪をなびかせた女性が強風の中を走っている絵が描かれていた。彼女の傍らの地面には小さな赤いバラの花があった。

ソ連のある画家による色付きの版画だったと思う。

魯迅先生はたくさんの版画をお持ちなのに、どうしてこの版画だけを枕元に置かれたのだろう。許先生も私に、魯迅先生がどうしていつもこの版画を見ておられるのか分からないと言われた<sup>32)</sup>。

誰かが先生にあれこれ質問すると、先生はこう言われる。

「自分で学びなさい、私がいなかったらどうするのですか」

今回魯迅先生は良くなられた。

それからひとつ違ったのは、仕事の量が増えたような……

魯迅先生はご自分が良くなったと思っておられたし、他の人たちも魯迅先生は良くなれたと思っていた。

冬には魯迅先生の仕事を始めて三十年になるお祝いをしようとしていた<sup>33)</sup>。

また三ヶ月が経った。

1936年10月17日、魯迅先生はまた病気になられた。また喘息だった。

17日、一晩中眠れなかった。

18日、一日中咳き込まれた。

19日の夜更け近く、衰弱がひどくなった。夜が明けようという頃、魯迅先生はいつものように、仕事を終え、眠りにつかれた<sup>34)</sup>。

1939年10月

1) 魯迅が海嬰をどれほどかわいがっていたかは「魯迅先生の思い出（上）」注18（2015.3『日本女子大学文学部紀要』第64号、以後「上」）にもある通りだ。

また許広平には次のような回想がある。悪ふざけが過ぎた時など、魯迅は新聞紙を丸めて厳肅に、しかしやさしく海嬰を叩いた。だが海嬰がすぐに「お父さん、もうしません」と叫ぶと、たちまちかわいそうになり、怒りも収まった、という（『魯迅先生與海嬰』：1939.8.20、9.5、『魯迅風』18、19：『許広平憶魯迅』1979、広東人民出版社）。

- 2) 許広平はこれについて次のようにいっている。

「魯迅は物をとても大切にした。どんなに小さな紙切れでも捨てようとはしなかったし、物を包んで持ち帰ったような紙でも、必ず平らにのばして取っておく。括ってあった紐も同じだ。一束ずつちゃんと巻いて置いておき、必要な時にそれを使う」（『魯迅先生與海嬰』）。

また魯迅は包み紙などを利用して封筒を作っていた。「北京にいた時、彼が、送られてきた、割合大きくて厚い封筒を裏返し、また時には長方形の紙を使って封筒を作るのをよく目にした。とてもきちんと釣り合いを取り、絶対に歪んだり、大きさがまちまちだったりすることもなく、決まったやりかたと技術で、手慣れたように、また素早く、あっという間に一組作り上げてしまう。包み紙を封筒にすることができれば、まさに無用のものを有用にすることだったし、更に彼の当時の経済的条件にかなっていた。（中略）包んであるものを開けると、紙を平らにのばし、保存して使えるようにしておくだけでなく、紐もちゃんと巻いて、一つ所に集めておき、必要な時に備えておく。長さや太さを選んで適切に使えるように」（『魯迅先生の日常生活』：『許広平憶魯迅』）。

- 3) 現在は「上海魯迅故居」として公開されている。1933年4月11日の日記に「本日大陸新村の新居に転居」とある。学研版『魯迅全集』（以後『学研版』）『魯迅日記』訳注は、引越しは海嬰の健康を考えてのことだったという。

大陸新村の家は上海の伝統的な建築、「里弄住宅」であった。大阪市立大学経済研究所編『世界の大都市2 上海』（1986.2、東京大学出版会、以後『上海』）は、「里弄住宅」には「旧式」のものと「新式」のものがあり、両者の違いは、「旧式」が外壁煉瓦造り、内部木造の混合構造であるのに対し、「新式」は外壁・本体共に煉瓦造りであること、「旧式」が各戸の入口に「石庫門」と呼ばれる特徴的な門を持つのに対し、「新式」にはそれがなく、「旧式」が二階建てであるのに対し、「新式」は三階建てであることを挙げている。そして上海魯迅故居を「新式里弄」住宅の典型例として挙げている。

- 4) 原文は「弄堂口」。『上海』は、里弄住宅は路地（里弄）でつながれ、「各住宅棟が直接公道に接するのではなく、その最前列棟かまたは路地だけが公道（表通り）に接し、各棟は敷地内通路で規則通りに結ばれている」と説明している。
- 5) 内容から、魯迅の家を初めて訪れた時の回想であろうと思われるが、実際に蕭紅と蕭軍が魯迅の家に招かれたのは1935年11月6日である。魯迅の11月5日付の手紙に、11月6日に招待したい旨が書かれており、6日の日記にもその日のことが記録されている。蕭軍の回想（『魯迅給蕭軍蕭紅信簡注釈録』1981、黒龍江人民出版社）でも同様である。

- 6) 「回憶魯迅先生」に先立つ、「魯迅先生記」（1938：『蕭紅散文』1940.6、大時代書局所収）と題した短い散文は、この万年青を中心に書かれている。以下はその全訳である。

「魯迅先生の花瓶は、絵に見える、西洋の女性が水を汲む時に使う瓶<sup>かめ</sup>のようだ。青みがかった灰色で、ところどころ釉薬が自然と盛り上がってできた模様がある。口の両側に二つの取手が付いていて、中に植えてあるのは何株かの万年青だ。

初めてこの植物を見た時、私はこう質問した。

『これは何という名前ですか。部屋に暖房がなくても、寒さで枯れないのですか？』

初めて魯迅先生の家に行った時、それは夕暮れに近い頃だった。しかも冬の。だからその一階の部屋は薄暗かった。魯迅先生の煙草が口元を離れテーブルの隅に留まると、その煙が真っ直ぐに、先生の白髪のあたりまで立ち上り、そしてやがて見えなくなった。

『これは“万年青”といって、ずっとこのままなのです』先生は花瓶の傍の灰皿に煙草の灰を落とされた。煙草の赤い火が、更に赤くなった。まるで小さな赤い花のように、先生の袖口から離れたところにあった。

『寒さは大丈夫なのですか』後になって、私はもう一度尋ねたことがある。それはいつのことだっただろう。

許先生が、『大丈夫なのよ、とても丈夫なの』と言われた。そして許先生は瓶の縁を持って揺すって見せられた。

その花瓶の底に丸い石が少し入れてあるのも分かった。それからは、よく分かったので自分でも何度かやってみた。その花瓶はいつも客間の黒い長机の上に置いてあったし、自分が寒い北方から

来たので、春夏秋冬、ずっと枯れることのない植物が、どうにも不思議でしかたなかったのだ。

今もこの『万年青』はまだ生きている。許先生の家に向う度にこれを目にした。これまで通りあの黒い長机の上に置いてあることもあったし、魯迅先生の写真の前に置かれていることもあった。花瓶は換わって、ガラス製になった。薄い黄色のひげ根が、鉢の底に立っていた。

許先生は私たちと話をしながら部屋中の花や草を点検されることがあった。枯れた葉がないか。切らなければならないものは切るし、水をやらなければならないものには水をやる。休みない動作は先生の習慣だった。この『万年青』を点検されることもあったし、魯迅先生について話されることもあった。魯迅先生の写真の前で話しているのに、その感じは、まるで昔の人のことを話すように、遙か遠いことのように思えた。

ところであの花瓶は？墓地の青草の上に持って行かれ、瓶の底はもうなくなっている。なくなっただけでも、空っぽのまま墓の側に置かれていた。私が見たのは春から秋までの間。それは隣の墓のザクロの木が花を付け、そして実を結ぶまですっとそのままだった。

戦争が始まってから、許先生だけが回り道をして一度行かれたことがある。ほかは誰も行かなかった。墓の草は長く伸び、しかも荒れ果てているに違いない。花瓶などいうまでもない、魯迅先生の陶製の半身像も荒れ果てた草で胸元まで埋まっているに違いない。

私たちはここで、魯迅先生を記念する文章を書くことしかできない。誰が墓の雑草を刈りに行こうとするだろうか。私たちはどんどん遠ざかってしまったが、どんなに遠くなくても、その荒れた草はいつも心にかかっている」

7) 原文は「偽満洲国」。

8) この時のことを蕭軍も書いている。

「この時の夕食を、私は腹一杯食べ、飲んだ。おいとましたのも遅く、夜の12時を過ぎていた。

帰ろうとすると、魯迅先生と許広平先生が私たちを建物の出口まで送ってくださり、門のところの電灯の外側にはめ込まれた、磨りガラスに大きく書かれた『茶』の字を指さしてこう言われた。

『この“茶”の字を覚えておきなさい。次に来た時に間違えないように』。もともとこの建物には日本人が開いた喫茶店があったのだ。実際、上海の家は、記憶力が悪く、しかも番地を忘れると、すぐ間違えてしまう。建物がほとんど同じように造られているからだ。だからその特徴をよく覚えておかなければならない」(蕭軍『魯迅給蕭軍蕭紅信簡注釈録』第五十三信注:1981.6,黒龍江人民出版社)。

9) 中国の伝統的な八人掛けの正方形のテーブル。明代よりこの名称が使用されるようになったらしい(高井たかね「八仙卓をめぐる諸問題:名称の出現時期及び明代の事例を中心に」:『東方学報』86号、2011.8)。

10) 魯迅は食後にビスケットなどを食べる習慣があった。「上」注48参照。

11) 上海魯迅故居の内部の写真を見ると、該当の場所に鏡台のようなものがあり、それを指していると思われる。

12) 原文では「沙發(ソファ)」だが、文脈からこのように訳した。

13) 原文は「油漆布」。辞書類にはテーブル掛け用に桐油などを塗った防水布とあるが、わかりにくいのでここでは単に「布」とした。

14) 魯迅は緑茶をたくさん飲んだ。特に濃いお茶が好きで、その影響で自分も濃いお茶が飲めるようになったと許広平はいつている(「魯迅先生的日常生活」)。

15) 許広平によれば、魯迅は毎日11時頃起きて来て、昼食はほとんど取らず、起きるなり仕事を始める。時には夕食まで何も食べない。夕食もおかずは二、三種類で、弱い酒をお椀に半分だけ飲む。客があればその相手をし、客が帰ってから再び仕事をし、2時頃横になる(「魯迅先生的日常生活」)。また、章衣萍の次のような記録もある。「茅盾が出国する前、上海の某所の三階建てに住んでいた。魯迅の住む三階建ての向かいだった。当時茅盾は『動揺』や『追求』といった小説を書いているところだった。深夜まで眠れない日がよくあったが、魯迅の家の方を見ると、まだ明かりが煌々とついている。そこでため息をついていったものだ。『また魯迅のように眠れなくなってしまうが、眠れないのは茅盾一人だけではない』」(「談魯迅」1934:『魯迅回憶録』)。

16) 原文は「海嬰公子」。「上」注18参照。

17) 許広平は、魯迅ほど本を大切にすることを人を見たことがないという。「例えば『小説月報』や『東方雜誌』のような定期刊行物が送られてくると、読み終わった後、必ず五、六冊ずつ一包みにして紐で括り、上に書名と何期から何期までかを書き、後で見やすいようにしておく。彼が包んだ本はとてもきちんとしていて、中を開けてしまうと、私にはもう同じように包めない。きちんと包むだけでなく、

括る紐にもとても気を配る。もしそれがちょっと良い本だったり、線装本だったりすると、括る時には必ず糊をきかせた綿の紐を選ぶ。括った場所に、時間が経つにつれて跡が付かないようにするためだ。この平べったい綿の紐は、括る時も平らでなければならず、最後の結び目は、必ず本の角に来なければならない。圧されて結び目の跡が付かないように。ある時、『文学』のような定期刊行物が送られてきたが、たまたま装丁がほかと揃わないものがあった。すると誰かに比較的具合の良いものをもう一冊買って来させた。自分で出版した本も、先ず二冊選び、きちんと包む」（「魯迅先生の日常生活」）。また魯迅は本の装丁や、汚れた本を軽石できれいに磨くようなことも自分でやったという。また注2参照。

- 18) クログワイは日本で一般的なクワイ（オモダカ科）と異なり、カヤツリグサ科の多年生草本植物で、長江以南の地で多く栽培されるという。煮たり炒めたり、生で食べることもできる（田中静一他『中国食物事典』1991.7、柴田書店）。筆者は偶々武漢でこれを食する機会があった。街角で皮を剥きながら売っており、生のまま食べるとシャキシャキした歯ごたえがあった。大して味はなく、軽いえぐみがあった。日本では缶詰で売られている。
- 19) ばあやについては「上」注44参照。
- 20) 元宵節の夜に子どもたちが引いて歩く兔型の提灯。
- 21) 魯迅日記によれば、1936年3月2日の午後、魯迅は喘息の発作を起こし、須藤医師に注射を打ってもらっている。この日の夜、蕭軍と蕭紅の二人が彼を訪ねて来たとある。投薬が中止されたのは、須藤医師の記録によれば3月29日である（『医学者所見の魯迅先生：付録、魯迅先生病状経過』：1936.11.15『作家』2-2、『魯迅回憶録』1999.1北京出版社）。この間、蕭軍と蕭紅は頻繁に魯迅を見舞っている。須藤医師については注22参照。
- 22) 須藤五百三（1876～1959）。岡山県成羽町の生まれで、第三高等学校医学部卒業後、陸軍軍医として北京などで勤務していたが、1918年頃上海で開業し、内山完造や魯迅の主治医となる。敗戦後は故郷に戻って開業したという（藤井省三『魯迅事典』2002、三省堂）。
- 23) 「死せる魂」については「上」注46を参照。

『学研版』訳者注によれば、瞿秋白の訳文集（『海上述林』）は出版すべく、1933年に既に魯迅から現代書局に推薦されてあった。ところが第三種人論争などで、現代書局がこの原稿をほったらかしにしてしまったため、瞿秋白の処刑（1935年2月）を期に、魯迅は原稿を取り戻して出版の準備を始めた。それが1935年8月12日である。出版については9月中に約六十万から六十五万字を上下二冊にするという概要がほぼ決定した。日記によれば、編集作業は同年10月22日から始められている。その編集作業を日記から拾うと以下のようである。

1935年10月22日 編集開始

11月4日 上巻の編集終了

12月6日 『海上述林』（第一部「弁林」）の校閲開始

1936年2月7日 上巻のゲラを送る

4月17日 下巻の編集開始

4月22日 上巻の校正終了、全681頁

5月13日 下巻の校正

5月22日 上巻の紙型とゲラを内山完造の手で東京に送り、岩波書店に印刷、製本を依頼

8月11日 残りの原稿を送る

9月30日 下巻校正終了

10月2日 上巻が届き、関係者に送り始める

『学研版』『集外集拾遺補編』に、魯迅が『ケーテ・コルヴィッツ版画選集』を許寿裳に送った時に添えた手紙（1936年7月27日の日付）が収録されており、その訳者注には、この選集はコルヴィッツの版画二十一点を収めたもので、スメドレーと魯迅の序文、及び目録を前に付し、5月に「三閑書屋」名義で出版されたとされている（『学研版』索引注では、出版は1936年7月）。また1935年6月16日の李樺宛書簡では、二ヶ月ほど前、コルヴィッツの版画二十余枚を北平に送って複製することにしたとある。同年5月12日呉朗西宛書簡で序文の校正刷りを受け取ったとあり、28日の同人宛書簡で校正を送ったとある。ケーテ・コルヴィッツについては「上」注32参照。

『三十年集』に関しては、1936年5月14日の曹靖華宛書簡に、やりたいと考えているがまだ決定していない、と書き、同年7月15日の張家璧宛書簡に「はじめの考えでは、数百部か千部、順を追って合本して出版し、記念とする程度でした。徹底的にいれかえるというのではありません。現在となっ



ては、この数百か千部を出版するということさえ、わかりません。それで、まったく白紙の状態です」と書いている。結局これは、生前に発表することができなかった。

- 24) 「死」は1936年9月5日に書かれ、20日に『中流』半月刊第一巻第二期に発表、その後『且介亭雜文末編』に収められた。

ここに魯迅は「昨年から、病後の休養の時、籐の寝椅子に横になるたびに、体力が回復してから、手をつけるべきことを考えるようになった。どんな文章を書くか、あるいはどんな書籍を翻訳し、印刷するかと。考えが決まってから、こうやろう——だが、急いでしなければならないという結論になった。その『急いでしなければならない』という気持は、以前はなかったことだ。知らず識らずのうちに自分の年齢を気にしていたからであるが、これまで直接的に『死』を考えたことはなかった」と書いている。

- 25) 許広平は、世間では彼が紹興出身であることから、大酒飲みであるかのように思っている人がいたが、そうではなかった、やらなければならない職務がある時は、先ず一番に時間を守り、絶対に飲み過ぎることはなかった、と言っている。それは、彼が尊敬している人が酒好きで、ところがどうにも酒癖が悪く、この印象が強かったためで、そこそこ飲むと自制し、どう勧めてもそれ以上は飲まなかった。しかし不機嫌な時は成り行きで少し過ごすこともあったという（『魯迅先生の日常生活』）。

- 26) 沈兼士は魯迅の好きなものは「煙草とお茶と餡」であったと回想している（『我所知道的魯迅先生』：『魯迅回憶録』）。「上」注29参照。

- 27) 原文は「莧菜」。ジャワホウレンソウとも呼ばれるらしい。

- 28) スメドレー等が手配したダン医師。

- 29) 平石『蕭紅作品及び関係資料目録』（2003、汲古書院）の写真資料№13がそれである。

- 30) 原文は「明朝会」。

- 31) 日記によれば、1936年4月7日、良友公司に行き、ソ連の版画の選定を行っている。『学研版』訳注によれば、2月にソ連版画展を見た趙家璧がそれに感動し、魯迅に是非編集して序文を書いて欲しいと頼んだ。3月末に木箱に入った作品数百点が良友公司に運ばれ、魯迅は病をおしてこの日良友公司まで出向いたという。6月後半、魯迅は口述で「序」を書き、『ソ連版画集』は7月に完成している。

- 32) この絵がどのようなものかはわからない。魯迅と絵画については多くの回想がある。例えば蔡元培はこのようにいう。「私は彼（魯迅）が絵画に関心を持っていることを知っている。彼は北平にいた時、既に漢代の碑に刻まれた絵画の拓本を集めていた。以前の漢代の碑を記録した本では、文字に注目しており、碑に刻された文様にはあまり関心を示していなかった。彼が特に集めたものは、既に数百種にのぼる。彼に会う時はよく印刷について相談した。印刷費がとても高かったので、とうとう実現はしなかった。（中略）魯迅は晩年版画を提唱し、ケーテ・コルヴィッツやE・ムンクの版画選集を出版している」（『記魯迅先生軼事』1936：『魯迅回憶録』）。

また曙天女士の次のような回想もある。

「私が絵画が好きなためだろう、魯迅先生は一冊また一冊とドイツの名画を持って来られた。

私はドイツ語は分からないので、絵だけを見ていた。

しかし絵に蛇が描いてある。私は蛇が嫌いだ。絵の上の蛇でも嫌いだ。

『絵を描く人は蛇を怖がってはダメですよ』と魯迅先生が言われる。

私は恥じらいの笑みを浮かべた。

魯迅先生はヨーロッパの名画をだいたい見ておられた。先生は絵画のデザインが大事だと言われた。しかし中国の絵画はほとんどデザインに何の工夫もないと（『訪魯迅先生——断片的回憶』1925：『魯迅回憶録』）。

- 33) 『三十年集』のことか。

- 34) 魯迅の最期の様子は多くの人が語っているが、魯迅は最後まで生きる努力を惜しまなかったようだ。例えば魯迅の良き友人であった内山完造は、自分の所で扱っている喘息の妙薬を何度も魯迅に勧めたが、魯迅は一度もそれを飲まなかった。ところが最期の時、駆けつけた内山が魯迅に勧めてみると、「先生は飛びつく様にして、三個迄飲んで下さった」（『臨終の魯迅先生』1936）という。

この時、蕭紅は東京にいた。魯迅の死を彼女は新聞で知るのだが、蕭軍は、彼女の気持ちをおもんばかって敢えて知らせなかったのだという。蕭紅が魯迅の死を悼んだ手紙を、蕭軍は「海外的悲悼」と題して上海で発表している（『中流』1巻5期、1936.11.5）。以下はその全訳である。

「軍：

周先生が亡くなったことは21日の新聞に出ましたが、私にもほんやりと分かりました。でもそれ



が本当にそうなのか信じられず、たった一人の知り合いに確かめに行ったのです。彼女は『あなたは日本語が分からないから、見間違えたんでしょう』と言いました。私は見間違いかもしれないという希望によって、安心して戻ってきました。出かける時は涙を流していたのに。

昨夜、私は泣かずにはいられなかった。中国語の新聞に先生の写真が載っているのを見てしまったのです。何と辛く悲しい瞬間だったことか。私の泣き声があなたたちの泣き声と一緒に残ることが残念です。

先生が私たちのもとを離れてもう五日経ちました。今先生はどこで眠っておられるのでしょうか。三ヶ月前お別れに行った時、先生は籐椅子に座っておられた。『波止場に着くたびに病気の検査官が来ますが、恐れることはありません。中国人は専ら中国人を脅すのですから。ボーイがこう言うんです。検査官が来た、検査官が来た……』

私はあなた（蕭軍）の手紙を待っています。

心配なのは許先生の哀しみです。何とかしてよく慰めてさしあげてください。一番は許先生を放っておかないことです。始終出入りして、一番辛いこの最初の時期を過ぎれば、それから最初の時よりも落ち着けるでしょう。それからあの子もいる。私には想像ができません。すぐにでも帰りたい。こうやって想像している時間が、完全な孤独の中にいる人間にとってどんなに恐ろしいことか。

最後に私の代わりに花輪か何かを供えてください。

許先生にこう伝えて。子どもの前ではあまり泣かないでくださいと。

紅 10月24日」

蕭紅が帰国するのは翌年の1月である。